

日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学
研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に
関するプロソポグラフィ的研究 (10)

—1980年以前の北海道大学教育学部スタッフのバイオグラフィー—

鈴木 篤

A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational
Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (10)
—Biographies of the Staff Members of the Faculty of Education of Hokkaido University
in or before 1980—

SUZUKI, Atsushi

大分大学教育学部研究紀要 第42巻第2号

2021年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 42, No.2, March 2021

OITA, JAPAN

日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソポグラフィ的研究 (10)

—1980年以前の北海道大学教育学部スタッフのバイオグラフィー—

鈴木 篤*

【要 旨】 本論文では「プロソポグラフィ」の手法を用いて、北海道大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフの伝記的データを収集し、それら相互の比較を通して、集団間・時期間の共通性と差異を確認するための準備作業を行った。北海道大学教育学部という事例において、彼らのアカデミックなライフコースに着目し、活字化された資料を用いている。

【キーワード】 プロソポグラフィ 教育学研究 北海道大学 歴史

I 問題の所在と研究方法

本稿は鈴木 (2018a) によって提起された課題に応えるべく鈴木 (2018b) から鈴木 (2020b) までで明らかにされた知見に対し、北海道大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフの事例を明らかにすることで、研究上の貢献を試みるものである¹⁾。研究方法は鈴木 (2018a) で示された通り、プロソポグラフィの手法を用いてあくまでも活字化された資料のみを使用しながら、検討対象高等教育機関に在籍した教育学研究スタッフの研究活動を取り上げ、制度面・スタッフ面におけるその発展の概要を描出することとする。そのことにより、今後、日本における教育学研究の歴史的発展過程に関するより詳細な研究が生み出されるための契機をもたらすことを目指したい。

日本の高等教育機関における教育学研究スタッフ設置状況の歴史的変遷については、①1886年～1901年 (帝国大学内の教育学講座、高等師範学校、女子高等師範学校がそれぞれ一つずつ揃った時期)、②1902年～1918年 (帝国大学内の教育学講座、高等師範学校、女子高等師範学校がさらに各一校増設された時期)、③1919年～1943年 (帝国大学内の教育学講座がさらに増設されるとともに、文理科大学が2校設けられ、教育学研究スタッフが大幅に増加した時期)、④1944年～1948年 (高等師範学校・女子高等師範学校が増設されるが、敗戦とその後の混乱を迎える時期)、⑤1949年～1965年 (新制大学の創設と戦後体制の確立期)、⑥1966年～1980

令和2年11月2日受理

*すずき・あつし 大分大学教育学部発達科学教育講座 (教育学)

年（学芸大学理念の転換と新構想大学の設置）の6期に区分することができよう。1980年度までの着任者を対象とする理由は、新構想大学としての筑波大学の開学（1973年）と東京教育大学の閉学（1978年）を経て、現在の教育学研究における制度的体制が一定程度整った時期としてこの時期が重要な意味を持つためである（時期区分はいずれも年度）。

本稿では「北海道大学教育学部における教育学研究スタッフ」という範囲に対象を限定し、プロソグラフィの作成を試みる。同機関の前身は名古屋帝国大学や大阪帝国大学と同様、戦前期には文系学部を持たなかった旧帝国大学であり、教育学部を設立する基礎のないところに教育学部を創設することとなった事例である。本稿の対象者はこれまでの各大学の事例に関する一連の論稿と同様、北海道大学教育学部の創設された1949年から、1980年度までの着任者とするが、これまでの論稿においては「比較的長期的な勤務を前提として採用が行われたと考えられる」ことを理由として「講師以上の職位での勤務者のみ」を対象としてきた。しかし、北海道大学教育学部の場合には以下で確認するように、講師としての勤務者が圧倒的に少数にとどまるのに対し、他大学の事例では1～3年程度の勤務にとどまる助手の職において長期間勤務する者が数多く確認された。その一方、講師として勤務する者は多くなく、また助手として勤務した後に講師を経ずして助教授となる者も多く、北海道大学教育学部では助手と講師とがある程度互換的な職として扱われていたものと思われる。そのことから、北海道大学教育学部に関する本稿においては対象者を「助手以上の職位での勤務者」に拡大している。

II 各機関の歴史と研究スタッフ

1 北海道大学教育学部の歴史

北海道大学教育学部は、1948年11月に旧制北海道大学内の大学設置基準委員会に教育学部設立小委員会が設置されたのを受け、1949年5月31日に国立学校設置法の交付により新制北海道大学の発足とともに創設された学部である。北海道大学は札幌農学校（1876年から1907年まで）、東北帝国大学農科大学（1907年から1918年まで）、北海道帝国大学（1918年から1947年まで。1947年に北海道大学へと名称変更）を前身とする高等教育機関であるが、戦前期には大阪帝国大学や名古屋帝国大学と同様に文系の学部を有しておらず、戦後、1947年に法文学部が設置されて以降、急速に文系学部・研究者を拡充していった。1953年3月31日には大学院教育学研究科も設置されている。

北海道大学教育学部には当初、教育史学や社会教育といった他の研究大学と同様の講座に加え、教育計画、産業教育、生活教育など、教育と関連する多様な講座が設けられていたが（生活教育講座と学校教育講座は1975年にそれぞれ教育社会学講座と教育方法学講座に改編）、それらの担当者は必ずしも教育学者には限られていなかった。そこで、収集した情報・資料を分析した結果、北海道大学教育学部では以下の21名の教育学研究スタッフの勤務が確認されるにとどまった。



図1 凡例（図2）

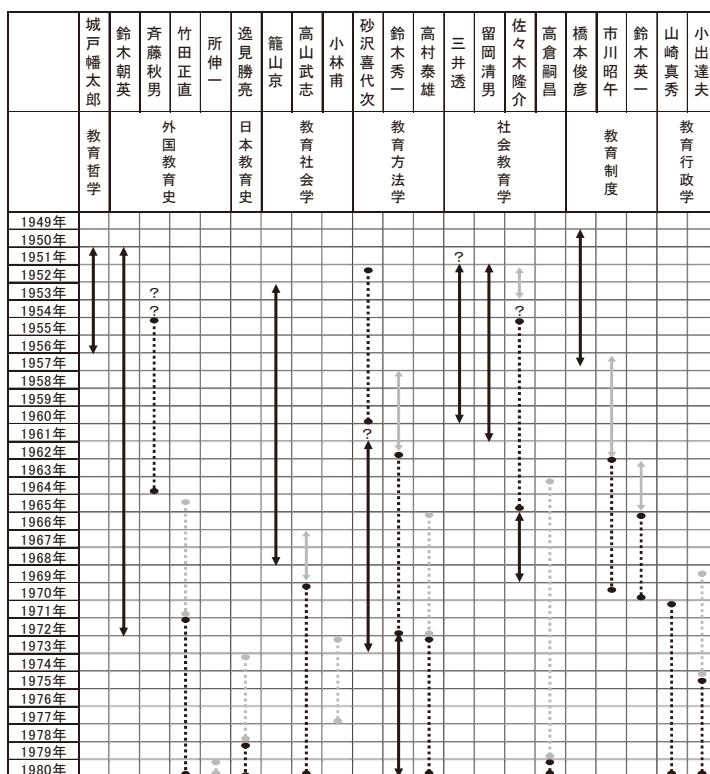


図 2 北海道大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフ

2 北海道大学教育学部に勤務した研究スタッフ

本研究における情報・資料収集作業からは以下の通りの研究スタッフ名とその詳細が明らかになった。

1) 教育哲学領域

城戸幡太郎（1893年7月1日愛媛県松山生，1985年11月18日没）は松山中学校で学んだ後（期間不明），1913年から1916年まで東京帝国大学文科大学の選科で学び，1919年には東京帝国大学文学部の副手，1920年には東京農業大学のドイツ語講師となった。1922年10月から1924年3月まではライプチヒ大学で学び，1924年9月から1944年までは法政大学教授を務めた。もともと，1944年から1945年までの間は治安維持法により検挙・拘束されている。戦後は文部省教育研修所において1945年11月からは所員，1946年3月から1947年12月までは所長を務め，同時に1947年9月15日から1947年12月3日までは東京文理科大学の教授を務めた。1951年6月1日から1957年3月31日までは北海道大学教育学部の教授となり（北海道大学教育学部創設50周年記念事業委員会『写真でつづる教育学部50年』では4月1日付，北海道大学『北大百年史』では3月31日付で退官となっている），その後，1957年6月から1963年までは中央大学文学部の教授，1963年8月27日から1967年8月26日までは北海道学芸大学の学長，1968年から1973年までは北星学園大学文学部の教授となった。1973年からは旭川大学経済学部の教授ならびに正則高等学校の校長を併任し，1977年度*²⁾まで

で旭川大学の教授を退職した後も、1982年3月までは正則高等学校校長を務めた。『心理学の問題』(1926)や論文「知覚に於ける形態の表象と関係の判断：ミュラー・ライエル氏圖形についての實驗」(『心理学研究』, 1927), 論文「ブレンターノの文化心理學より觀たるマルキシズムとファシズムとの哲學」(『心理学研究』, 1932), 『文化心理学の探究』(1970)など心理学に関する著作を数多く持つほか、戦前期には『古代日本人の世界觀：日本の言語と神話』(1930)や『表現学序説』(1934)などの国語や国文学に関する研究に数多く取り組んだ。戦後は論文「学力の問題」(『教育心理学研究』, 1953)など、教育に関する幅広い問題を論じている。

2) 教育史領域

鈴木朝英 (1909年4月23日東京生, 2000年9月11日没) は浦和高等学校において1927年4月から1930年3月まで学んだ後、東京帝国大学文学部(東洋史学科)において1930年4月から1933年3月まで学んでいる。その後、豊島師範学校において1933年4月から1939年*まで?教授として勤務し、1940年5月からは財団法人善隣教会回教圏研究所の研究員となっている。1944年3月からは陸軍の司令官としてマライ半島宗教教育行政調査研究に従事するが、終戦を経て、1946年2月に帰国している。1946年4月からは国立教育研修所(1949年以降は国立教育研究所)の研究員(国際教育部門)となり、次いで社会科教育研究室主任を経て、1947年11月からは教育内容研究室主任となった。1950年に北海道大学に異動すると、1950年5月15日から1951年9月までは文学部の教授、1951年9月15日から1973年3月31日までは教育学部の教授となっている。1973年4月から1977年までは名寄女子短期大学の学長兼教授を務め、その後は札幌商科大学人文学部に教授として勤務している(期間不明)。『インドの回教徒』(1942)や論文「後進国開発理論と教育」(『教育史論考』, 1963)など、東南アジアの社会と教育に関する論稿や、『比較教育』(1958)などを著している。

斉藤秋男 (1917年7月18日生) は東洋大学文学部で学んだ後(期間不明)、東洋大学講師を務めている。1953年に北海道大学教育学部に異動すると(当初の職階は不明)、遅くとも1955年*から1965年3月31日までは助教授を務めている。その後、1965年*からは専修大学商学部教授として勤務した。著作に『新中国の教育建設』(1950)や論文「中国における教育科学研究の現況」(『教育学研究』, 1958), 『中国現代教育史：中国革命の教育構造』(1973)など中国の教育に関するものや、『陶行知生活教育理論の形成』(1983)など陶行知の理論に関するものなどがある。

竹田正直 (1936年9月18日北海道浜益村生) は北海道大学教育学部において1955年から1959年まで学び、同大学院教育学研究科で1959年から1965年まで学んだ後、北海道大学教育学部に着任し、1965年7月から1972年3月までは助手、1972年4月から1982年までは助教授、1982年10月から2000年3月31日までは教授として勤務している。2000年からは北海学園大学経済学部の教授を務めた。1990年3月24日には学位論文「ロシア革命と民主主義教育」により北海道大学から教育学博士の学位を授与されている。論文「ソビエト教育史研究の視点：農村青年学校と工場実習学校への道」(『教育史論考』, 1962)や論文「革命前ロシアにおける教育運動-第一次ロシア革命(1905)期の高校生運動の実証的研究」(『北海道大学教育学部紀要』, 1967)などロシア・ソビエト教育史に関する研究業績を多く持つ。

所伸一 (1948年9月27日生) は北海道大学教育学部で学んだ後、同学部に着任し、1980年から1989年*までは助手、1990年*から1990年*から2001年*までは助教授、2002年

*から 2011 年*までは教授を務めた。その後は札幌保健医療大学保健医療学部に教授として勤務している。1979 年 12 月 25 日には学位論文「十月革命前夜のロシアにおける教員組合運動」により北海道大学から教育学博士の学位を授与されている。論文「十月革命前夜の全ロシア教員組合運動史」(『北海道大学教育学部紀要』, 1978) や論文「ロシア・ソビエト共和国「統一労働学校令」の実施過程：無償制原則(第 3 条)の危機とこれへの対応 (1921-1923) を中心に」(『日本の教育史学』, 1985), 論文「ペレストロイカ下ソ連の教育史の見直し」(『北海道大学教育学部紀要』, 1991) など、ロシア・ソビエト教育史に関する研究に取り組んだ。

逸見勝亮 (1943 年 6 月 3 日生) は北海道大学教育学部で 1966 年 3 月まで学び、その後、同教育学研究科において 1974 年 3 月まで学んでいる。1974 年に同学部に着任すると、同年 3 月から 1979 年まで助手、1979 年 4 月から 1991 年までは助教授、1991 年 3 月から 2007 年 3 月までは教授として勤務している。1991 年 9 月 30 日には学位論文「師範学校制度史研究：15 年戦争下の教師教育」により北海道大学から教育学博士の学位を授与されている。著作に『師範学校制度史研究：15 年戦争下の教師教育』(1991) などの師範学校史に関する研究や、『学童集団疎開史：子どもたちの戦闘配置』(1998) や論文「皇后のビスケット：集団疎開学童ニ対シ御激励ノ思召」(『日本の教育史学』, 1999) など第二次世界大戦下の子どもたちに関する研究、そして論文「第二次世界大戦後の日本における浮浪児・戦争孤児の歴史」(『日本の教育史学』, 1994) や論文「自衛隊生徒の発足：1955 年の少年兵」(『日本の教育史学』, 2002) など戦後の子どもたちに関する研究がある。

3) 教育社会学領域

籠山京 (1910 年 11 月 15 日長崎生, 1990 年 6 月 16 日没) は慶応義塾大学医学部を 1934 年に卒業後、1936 年 11 月に慶応義塾大学医学部の講師を務めると、同年より満鉄衛生研究所に所員として勤務した。1940 年 5 月には同研究所を退職して慶応義塾大学医学部の講師に戻るが、その後は日本鋼管や日本製鉄保健課などに勤務した後、1944 年には満鉄衛生研究所の所長となる。終戦後は満鉄衛生研究所の所長を続け (名称は中ソ合弁の中長鉄道会社へと改称) 1946 年 7 月の抑留解除にともなって帰国し、同年 9 月からは中央労働学園大学調査部の惨事となった。同大学に社会学部が創設されると、1947 年より同学部の教授を務め、1951 年からは法政大学の教授となっている。その後、1953 年に北海道大学教育学部に着任すると、1969 年 3 月 31 日まで教授として勤務し、1969 年から 1981 年までは上智大学文学部の教授を務めた。『国民生活の構造』(1943), 『労働年齢論』(1944) 『勤労者休養問題の研究』(1944), 『労働と休養』(1950) など生活と労働の問題、そして『家庭の経営と管理』(1958) など家庭生活に関する著作や論文「貧困家庭の学童における問題」(『教育社会学研究』, 1953) や論文「漁村における児童労働と学校教育の関係に関する一研究」(『教育社会学研究』, 1955), 『低所得層と被保護層』(1970) など社会福祉に関する著作を持つ。

高山武志 (1926 年生) は中央労働学園 (本科第 1 部) において 1947 年 4 月より学んだ後、1953 年に北海道大学教育学部に入学している。1957 年 3 月に同大学院教育学研究科 (修士課程) を修了すると、1958? 年から 1967? 年まで北海道教育研究所の研究員を務めた後、1967 年に北海道大学教育学部に着任した。同年 4 月からは講師、1970 年からは助教授、1980 年から 1989 年までは教授を務めている。著作に論文「学力と地域差」(『教育社会学研究』, 1959) などの地域間教育格差に関するものや、論文「教育と福祉：イギリスのパストラル・ケアにつ

いて」(『教育福祉研究』, 1991) などのイギリスの教育と福祉の問題に関するものなどがある。

小林甫(1940年10月5日生)は北海道大学文学部で学んだ後(期間不明), 1973年から1977年*まで北海道大学教育学部で助手を務め, 1981年*から1990年*までは助教授, 1991年*から1995?年3月31日までは教授となっている。1995?年*から1999年*までは北海道大学高等教育開発総合センター, 2000年*から2003年*までは北海道大学文学部でそれぞれ教授を務めている。その後, 2005年*からは松山大学人文学部に教授として勤務した。2006年3月24日には学位論文「生成する〈学び〉と現代社会:《地域社会》変動の学習社会論的考察」により北海道大学より博士(文学)の学位を授与されている。著作に論文「炭鉱労働者の労働史と労働組合:北炭平和炭鉱及び北炭夕張新炭鉱での"職場の構造"の実証的研究」(『社会政策学会年報』, 1984)など労働運動史, 論文「日本リベラリズムの伝統とマルクス主義:一九二〇~四五年の時期における知識人の思想構造の研究」(『社会学評論』, 1973)など社会思想史, 『大転換期と教育社会構造:地域社会変革の学習社会論的考察』(2010)など社会と教育の関係に関するものなどがある。

4) 教育方法学領域

砂沢喜代次(1910年9月14日鳥取市生, 1983年3月7日没)は1933年まで広島高等師範学校で学び, その後, 広島文理科大学で1938年まで学んだ後, 1938年3月から1941年5月まで福島県師範学校の教諭, 次いで静岡第二師範学校(浜松)の教諭(期間不明), その後は北海道第三師範学校(旭川)において1946年11月12日からは授業嘱託, 1947年1月30日から1949年6月30日までは教授を務めた。1949年からは同師範学校の北海道学芸大学旭川分校への改組に伴い同助教授となり(1949年6月30日から1952年4月1日), さらに1952年4月1日から1952年5月16日までは教授となった。1952年に北海道大学教育学部に異動すると同年5月16日からは助教授, その後, 1974年3月31日まで教授を務めた。さらに1977年*から1982年*までは創価大学教育学部の教授としても勤務している。著作に『学習過程の実践的研究』(1959), 論文「教授・学習課程の構造分析」(『北海道大学教育学部紀要』, 1960), 『授業記録のとり方』(1963), 『授業組織化の基礎理論』(1966), 『集団思考の方法』(1979)などの授業論に関する研究があるほか, 論文「國家の機能と教育の自由」(『教育学研究』, 1953)や『西欧・ソ連との教育対話』(1968)なども存在する。

鈴木秀一(1929年6月7日山形県生)は1949年4月に東京大学に入学し, 1952年3月まで東京大学文学部, 1952年3月から1954年11月までは同大学院で学んでいる。1954年12月1日から1958年4月までは小樽商科大学の講師を務め, 1958年に北海道大学教育学部に異動すると同年5月1日から1962年11月30日までは講師, 1962年12月1日から1973年3月31日までは助教授, 1973年4月1日から1990年3月31日までは教授として勤務した。その後は札幌学院大学社会情報学部の教授を1990年4月1日から1998年3月まで務めている。1976年3月から1977年2月までは文部省在外研究員としてソ連, ポーランド, 西ドイツ, アメリカを訪問している。『教育方法の思想と歴史:経験主義理論の批判を中心に』(1978)論文「教育および教育研究における総合の問題」(『北海道大学教育学部紀要』, 1991)や『態度評価の学力論 どころが問題か』(1993)などのカリキュラム・評価論, 論文「アメリカにおける経済恐慌と教育の轉換」(『教育学研究』, 1953)や論文「「デューイ教育理論における教育方法原理の検討」(『小樽商大人文研究』, 1958)などのアメリカ研究, 論文「教育学研究にお

る実験」(『教育学研究』, 1972)などの研究方法論に取り組んだ。

高村泰雄(1930年7月5日生)は北海道大学理学部で学んだ後(期間不明), 教員として当別高等学校定時制および札幌西高等学校定時制に勤務した(それぞれ期間不明)。1966年に北海道大学教育学部に着任すると, 同年4月から1972年*までは助手, 1973年*から1982年*までは助教授, 1983年*から1994年3月31日までは教授を務めた。その後, 1994年*と1995年*には室蘭工業大学工学部の教授を務めている。著作に論文「教授学研究の方法論的諸問題-1-」(『北海道大学教育学部紀要』, 1972), 論文「教授学研究ノート: 授業書作成をめぐる若干の方法論的問題」(『北海道大学教育学部紀要』, 1975)などの授業方法論に関するものが存在する。

5) 社会教育領域

三井透(1897年11月東京都生, 1987年8月5日没)は東京帝国大学文学部で学び(期間不明), 法政大学に勤務した(期間・職階は不明)。戦後, 1951年から1961年3月31日まで北海道大学教育学部に勤務し(1951年*と1952年*の職階は不明, 1953年*からは教授), 1962年10月2日から1963年8月27日までは北海道学芸大学の学長となり, 1965年*から1968年*までは酪農学園大学酪農学部の教授を務めた。論文「ヘーニヒスワルト「律動の問題」」(『心理学研究』, 1926), 論文「部分と全體との表現関係について」(『心理学研究』, 1934)などの心理学に関する研究のほか, 『国語と国民性』(1934)などの研究も存在する。

留岡清男(1898年9月16日東京生, 1977年2月3日没。留岡幸助の四男)は東京帝国大学文学部心理学科を1923年3月に卒業した後, 法政大学に勤務し, 1929年8月からは東京家庭学校サナプチ分校の教頭を務めている。その後, 法政大学教授となるが(期間不明), 戦後は1949年より東京家庭学校サナプチ分校の校長を務めるとともに1952年4月から1962年3月31日までは北海道大学教育学部に教授として勤務した。1962年4月から1968年3月までは北星学園女子短期大学の教授を務め(その間, 1965年*から1966年*までは北星学園大学経済学部の教授も務めた), さらに1968年4月から1971年3月までは北海道栄養短期大学の教授となり, 1971年4月からは北海学園女子短期大学の学長となっている。その後, (『大学職員録』では1973年6月末日時点で在職が確認できるものの) 公には1974年4月から1977年2月3日までは旭川大学経済学部の教授を務めた。初期には論文「感覚と比較(ジュリウス・ピクラア)」(『心理研究』, 1923)や論文「ナトルプの観たるリップス」(『心理研究』, 1925)などの心理学研究に取り組んだが, 後には『生活教育論』(1940)や『村づくりと人』(1957)などの生活教育の研究に取り組んだ。

佐々木隆介(1919年5月23日生, 2003年1月5日没)は北海道帝国大学農学部で学び(期間不明), 北海道庁での勤務を経て(期間不明), 1952年に北海道大学教育学部に講師として着任した。その後助教授を経て(昇任時期不明, 1965年*まで), 1966年*から1970年3月31日まで教授を務めた。その後, 1973年*に北星学園大学文学部の教授として勤務するものの, 翌年にはまた名簿から名前を消し, 1975年*から1991年*までは藤女子大学文学部, 1992年*には藤女子大学人間生活学部に教授として勤務した。著作には『農地改革と青年: 日本及び世界の農地改革』(1948)や論文「北海道の農業協同組合諸活動における教育・文化事業の地位とその振興に関する一研究」(『北海道大学教育学部紀要』, 1954)などの農業論, 論文「北海道における地域教育計画の実際」(『社会教育』, 1953), 論文「北海道の中・高校・公民館等

における産業図書利用に関する調査』（『北海道大学教育学部紀要』、1962）、論文「北海道の産業振興とマス・コミュニケーション--八雲町大新青年学級の場合について」（『北海道大学教育学部紀要』、1963）などの社会教育論に関するものなどがある。

高倉嗣昌（1937年12月23日生）は北海道大学（経済学部？）で学んだ後（期間不明）、1964年から1979年*まで北海道大学教育学部の助手を務め、1980年*と1981年*には助教授を務めるが、1981年には同年新設の北海道大学医療技術短大部の所属となり、1981年*から1986年*までは助教授、1987年*から1993年*までは教授として勤務した。1994年*からは北海学園大学経済学部の教授となっている。論文「過疎地帯における社会教育:北海道の場合」（『教育社会学研究』、1968）など北海道の地域社会教育事情の研究や、論文「北海道における市町村社会教育主事の実態と意識構造」（『日本の社会教育』、1974）など北海道の地域社会教育行政に関する研究に取り組んでいる。

6) 教育制度領域

橋本俊彦（1906年11月10日生）は九州帝国大学法文学部で1934年まで学んだ後、1935年から1940年まで函館高等水産学校の講師、1940年から1943年までは室蘭高等工業学校の教授、1943年から1950年までは東北帝国大学の助教授、1950年（1951年と記載する資料も存在）から1957年（1962年と記載する資料も存在）までは北海道大学教育学部の教授を務めている。1955年から1970年までは北海道学芸大学（1966年4月より北海道教育大学教育学部（札幌分校））に教授として勤務し、1970年から1988年3月までは北海学園大学教養部に教授として勤務している。論文「大学教育原理と一般教育の教育学的基礎」（『北海道学芸大学紀要 第1部 教育科学編』、1962）など大学教育に関する著作や論文「教師養成の特質」（『北海道学芸大学紀要 第1部 教育科学編』、1963）など教員養成に関する著作を持つ。

市川昭午（1930年4月16日長野県上高井郡小布施町生）は東京大学教養学部で学んだ後、東京大学大学院人文科学研究科の修士課程を1955年3月に修了し、1957年8月16日から1962年度までは講師、1963年度から1970年10月15日までは助教授として北海道大学教育学部に勤務した。その後、1970年10月16日から1993年までは国立教育研究所の研究員、1993年4月1日から1995年3月31日までは次長を務めるが、その間、1973年4月から1975年4月までは併任の形で東京教育大学教育学部の助教授を務めている。1995年度*から2000年度*までは国立学校財務センターに教授として勤務した。著作には論文「学校とは何か：役割・機能の再検討」（『教育社会学研究』、1972）などの教育の効果に関するもの、『学校管理運営の組織論：現代教育の組織論的研究』（1966）などの学校経営に関するもの、『教育行政の理論と構造』（1975）など教育行政に関するもの、『専門職としての教師』（1969）など教師の専門性に関するもの、『生涯教育の理論と構造』（1981）など生涯学習に関するものなどが存在する。

鈴木英一（1932年1月2日東京府北豊島郡巢鴨町生、2005年11月12日没）は1951年4月に東京大学教養学部文科II類に入学し、1955年3月に東京大学教育学部を卒業した後、1956年4月から1958年3月までは同大学院人文科学研究科修士課程、1958年4月から1963年3月までは博士課程で研究に取り組んでいる。1963年5月から1966年までは講師、1966年4月から1971年3月31日までは助教授として北海道大学教育学部に勤務した後、名古屋大学教育学部に着任すると助教授（併任）（1970年11月から1971年まで）、助教授（1971年4月から1975年まで）、教授（1975年10月から1995年3月まで）を務めた。退職後は1995年*

から1996年*までは東海産業短期大学、1997年*から2003年までは帝京平成大学（教職課程）に教授として勤務している。1979年8月から1980年8月までは文部省在外研究員としてイギリスおよびアメリカに滞在した。1984年3月26日には学位論文「日本占領と教育改革」により名古屋大学から法学博士の学位を授与されている。著作には論文「全国学力調査における教育政策の論理構造」（『教育学研究』、1962）など学力調査に関するもの、『現代日本の教育法』（勁草書房、1979）などの教育法に関するもの、論文「戦後日本の教育改革思想：とくに自由主義的知識人の戦前教育批判とその形成基盤について」（『北海道大学教育学部紀要』、1964）などの教育思想史に関するもの、『日本占領と教育改革』（勁草書房、1983）などの戦後教育改革に関するものなどがある。

7) 教育行政学領域

山崎真秀（1930年9月25日東京市生、2007年6月14日没）は高校卒業後、1949年4月から1950年3月まで東海銀行の社員として勤務した後、静岡大学文理学部において1950年4月から1951年3月まで学び、1951年5月から1952年3月まで静岡県志太郡瀬戸谷村率瀬戸谷第二中学校の助教諭を務めるが、再度、早稲田大学第一文学部において1952年4月から1953年3月まで学んでいる。その後、1953年4月から1957年3月までは東京学芸大学学芸学部（中学校教員養成課程社会科）で学び、1957年6月から1967年*までは東京学芸大学の法学研究室において助手を務めている。その間、東京大学社会科学研究所の高岡信一教授のもとで1966年9月から1967年2月まで内地研究員を務めている。1967年には広島大学教養部に異動し、10月1日から1969年9月30日までは講師、1969年10月1日から1971年3月31日までは助教授を務めるが、1971年4月からは北海道大学教育学部の助教授となり、1981年からは東京学芸大学教育学部の教授となるものの、1985年4月から1994年3月までは静岡大学人文科学部の教授を務め、1997年から2001年には国分寺市長も務めている。『憲法と教育人権』（1994）などの人権としての学習権に関するものや、論文「大学の自治」の思想と慣行：日本における展開」（『法社会学』、1966）などの大学の自治や自由に関するもの、論文「広島大学における大学改革の思想と現状--教養部改革案を中心として」（『教育学研究』、1969）など大学改革に関するものなどの著作を持つ。

小出達夫（1938年8月1日長野県塩崎村生）は1958年4月から東京大学理科Ⅱ類で学ぶが、1960年3月に退学し、1961年に東京大学教育学部に再入学している。その後、1963年4月から1969年8月まで同大学院教育学研究科で学ぶが、すでに1965年1月から1970年3月まで青森県国民教育研究所の所長となっており、1969年に北海道大学教育学部に着任すると、同年8月から1975年6月までは助手、1975年7月から1989年12月までは助教授、1990年1月から2002年3月までは教授を務めた。論文「教育行政における自治原理の基礎的考察」（『北海道大学教育学部紀要』、1974）など教育行政に関する研究や、論文「ドイツ民主共和国における教育と法--1958～1962年を中心に」（『北海道大学教育学部紀要』、1978）や論文「東ドイツにおける反ファッショ・民主主義的教育改革(1945～1946)」（『北海道大学教育学部紀要』、1980）など東ドイツの教育に関する研究、そして後には論文「1990年代におけるアメリカ高校教育改革とオレゴン教育法--平等性・差異性・公共性・責任性の4原理を中心に」（『北海道大学教育学部紀要』、1998）など後期中等教育に関する研究に取り組んでいる。

Ⅲ 小括（本稿の結びに代えて）

本稿では北海道大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフの事例を明らかにすることで、一連の先行研究に対する研究上の貢献を試みた。集められた資料からは、北海道大学教育学部におけるスタッフ面での組織的発展過程ならびに各研究スタッフの伝記的データが明らかになった。もっとも、これらの伝記的データを基にした数量的分析などは紙幅の関係上、本稿では断念せざるを得なかった。また、それらの分析をもとに研究機関ごとの特徴や差異を明らかにする作業は、今後、他の研究大学ならびにその前身高等教育機関に勤務した教育学研究スタッフに関連するさらなる知見が一定程度蓄積されてはじめて可能となるものであり、現時点ではそうした研究の進展を待つこととしたい。

附記

本研究は科研費（19K02506）の助成を受けたものである。

注

- 1) 本稿の課題と直接的な関係を持つ研究ですでに公刊されているのは、東京大学教育学部、広島大学教育学部、東北大学教育学部、筑波大学教育学域、名古屋大学教育学部とそれらの前身高等教育機関に関する以下の諸研究である：鈴木篤（2018a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (1)—Method and Process of This Study and Limits of Previous Related Studies—」、『大分大学教育学部研究紀要』第39巻2号，191-210頁，鈴木篤（2018b）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (2)—Biographies of the staff members of Tokyo University and its Forerunner Institution in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第39巻第2号，211-232頁，鈴木篤（2018c）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (3)—Biographies of the staff members of Hiroshima University and its Forerunner Institutions in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第40巻第1号，43-67頁，鈴木篤（2019a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (4)—Biographies of the Staff Members of Tohoku University and its Forerunner Institutions in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第40巻第2号，227-239頁，鈴木篤（2019b）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (5)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (1)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第40巻第2号，241-256頁，鈴木篤（2019c）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (6)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (2)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第41巻第1号，27-42頁，鈴木篤（2020a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research

Universities and Their Forerunner Institutions (7)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (3)—, 『大分大学教育学部研究紀要』第 41 巻第 2 号, 149-158 頁, 鈴木篤 (2020b) 「日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソグラフィ的研究(8)—1980 年以前の名古屋大学教育学部スタッフのバイオグラフィー—, 『大分大学教育学部研究紀要』第 42 巻第 1 号, 13-28 頁。

2) 大学一覧や大学職員録, 官庁の職員録以外に確認する手段の見当たらなかった, 年度単位の年号については*印を付している。

A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (10)

—Biographies of the Staff Members of the Faculty of Education of Hokkaido University in or before 1980—

SUZUKI, Atsushi

Abstract

In this paper, using the method called ‘Prosopography’, I collected biographical data of the staff members in educational studies in the Faculty of Education of Hokkaido University as a preparation to compare them to find the common characteristics and differences between groups and chronological periods. I concentrated on the course of their academic life and based my analysis on published materials concerning the case of Hokkaido.

【 Key words 】 Prosopography, Educational Studies, Hokkaido University, History